滿鐵鉄道建設秘話（下）

穆稜河と闘ふ踏査隊

峰岡貞雄

泥濘と惡闘

昭和九年十月二十三日、我々同勢約六十名は密山に勢揃ひした。林密線の終點密山の背後地たる楊木崗から黑咀子、虎林に至る迄の踏査をするのがその任務だ。

この邊は不氣味な××××、全般的に土地の事情は判らない。蛇の樣に曲りくねつた穆稜河が魔物の樣に横たはつてゐる。十月末と云ふのに氣溫はいつかな下らず、薄氷すら見ない。前途に擴がる××××の野原を如何して踏査するか、魔の穆稜河を如何して征服するか、我々の胸中を往來するのはたゞ不安のみである。氣は焦るが結氷を待たねばトラック行進は不可能と知つてゐるので、毎日天空を睨み乍ら、時期の到來を待つた。

月が變つて十一月、氣溫は稍や下つた樣だ。取敢へず第一回の踏査隊を出動させるに決定、同月五日の早朝、先發隊は二日分の食糧を携行、勢よく宿舍を飛び出した。が、二時間も經たぬ裡に悄然と引返して來た。續く

第二回目も泥濘のために失敗に終つた。

時はもう十一月も半ば、併し漸く薄い氷が張り始めた程度で、完全に凍る見透しがつかぬ。と云つて何時迄もじつとしてゐる譯には行かぬ。一同熟議の結果、道路を修理し乍ら進むことに決定、その第三回踏査班長には僕が任命せられた。土地の顔役に樣子を訊くと、……二十二字削除……想像以上に酷いようだ。密山に來て、早や半箇月以上も經過し、隊員六十名は皆殺氣立つて來た。

斯くて、十一月十六日未明、班長以下三名それに掩護隊と警備員、合計二十數名は二泊分の食糧を整へて、トラック三臺に分乘、曉の闇を衝いて出發、途中極めて順調、午前十時、楊木崗の手前約十粁の地點に到達した。この邊は有名な匪賊の巣窟だ。その頃、氣にかゝつてゐた一臺はスプリングを折つて了つた。修理に二時間はかゝると云ふ。殘して置くのは危險だが、待つてゐることも許されない。已むなく、警備員五名を殘して、他は前進、軈て楊木崗に入つた。

此の日は殘して來た車の到著を待つて、此處に一泊、明くる十七日、一同午前三時起床、今日こそは目指す穆稜河を衝とうと、殘留隊二、三名とトラック一臺を殘して、二臺に分乘した隊員は、殘月を踏んで勇躍出發した。夜は未だ固く閉して明けようともしない。辛うじて雪の上に殘つた馬橇の轍をヘッドライトで探し求め乍ら進む。五時半頃、穆稜河迄十五粁とおぼしい地點で一臺のトラックは到頭前輪を突込んで了つた。明方の空は暗く、空氣は肌を刺す樣に冷い。八方手を盡した擧句約二時間を費して漸く車を曳揚げ、更に前進、文字通り薄氷を踏

む心地で、目指す小山渡しも間近くなつた時、氷が約五十米位破れてゐる箇所にぶつかつた。トラックで乘切る術もないが、折角だから穆稜河を見極めて來ようと、車と警備員五名とを殘し、他の者は徒歩で進んだ。この日は非常に暖かく、午前十時頃から氷は一齊に解け出した。一同は防寒外套を脱ぎ棄て、手には辨當だけ提げて出掛けた。邊り一面泥濘である。一歩は高く、一歩は低く、小山渡迄の僅か二里の道で、みんなフラ〳〵に疲れて了つた。それでも初めて穆稜河の正體を突止めた一同は、飯を食ひ元氣を出して河を檢べにかゝつた。渡場では船頭が「何時凍るか判らぬ」と云ふ情けない返辭をする。附近を檢べて見ると約五十米位の上流と下流には薄氷が張つてゐて、氷のないのは渡場だけだと判つたが、凍るのを待つてゐたら何時のことやら判らぬ。これは船で渡るより仕方があるまいと見極めをつけて又二里の道を引返した。車の所に歸つて來た時はもう午後三時だ。日暮まで一時間しかない。急いで歸ろうとするが路面はもうザクザクに解けてゐる。道は遠い。無理かも知れぬが何でも一臺通して見ろ、とやらせると車は苦もなくザーツと落込んで了つた。全員で曳揚ようとするのだが、底無しの泥沼の樣に、手を下せば下すだけ車はじり〳〵沈んで行く。その内に車輪ばかりかボデイまではまり込しで了つた。どうてもなうね。

それでは自動車を棄てるとして、これから××××××の道を如何して歸へれるだらう。一同は參つて了つた。短い冬の陽は早や西に沒して邊りは段々薄暗くなつて來た。

男の二友誼

歩くとしても×××××××、泊るとしても濕地の中の離れ小島の樣な小山、連絡は勿論とれない。而も匪賊の巣に近い、僅か×××位の兵力で宿營するのは最も危險だ。空腹の上に死の樣な疲勞、附近には飯焚く場所もない。

小山を調査して來た警備員が、山上の家は匪賊に襲擊されて毀れてゐるが、どうやら飯も焚け、泊れるだらう、と報告。今夜十二時頃出發と決めて車を殘して一同は小山の上に登り毀れた民家に入つた。日はもうとつぷり暮れた。十一月半ばだと云ふに氣溫はぐん〳〵昇り、曇つてゐた空からは雨さへ降つて來た。この分では今夜十二時になつても到底凍りそうもない。幸ひ米と味噌だけは持つてゐたので、此處でジャガ芋を貫つて味噌で煮て喰つた。家人の話では、九月頃約二十名の匪賊が來て亭主を拉致され、牛馬家財一切を掠奪されたとのことだが、我々に何一つ賣る物を持たず、僅かに野菜だけで露命を繋いでゐると云ふ慘めさである。警備員を不審番に立たせ他の者は狹い部屋に横になつて假睡することにした。疲れてはゐるが眼は冴へる。夜は九時となり十時となつても氣溫は下らぬ。氷は益々解ける一方だ。十二時の出發を午前三時と變更して、落著かぬ一夜を過した。

三時、一齊に起床して朝食は攝らず山上の家を出發した。星明り一つない眞の闇を懷中電燈の僅かな光を頼りに山を下つた。下り詰めた所は深い河になつてゐる。適當な間隔を置きつゝ河を渡り始めた。先頭は輕機を擔つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た兵隊さん、續いて毛布を抱いた周君、續いて數名渡つたかな、と思ふ途端に「救けて呉れ！」と周君の聲、續いて「オーイ、輕機だ、輕機だ」と兵隊さんの叫び聲がする。素破！　と皆慌て出したが、氷の厚さは〇寸に足らず、メリ〳〵と今にも足許から裂け落ちそうだ。如何することも出來ず暫く呆然としてゐたが、見ると毛布や防寒外套がふわり〳〵流れてゐる。周君の救ひを求める聲、浮きつ沈みつ氷に掴まろうとする兵隊の身悶えする姿、數間先から徒らに見守るばかりだ。この時、突如一人が兵隊の方に身を挺して躍り出た。「三勇士の」異名を持つ勇敢なる隊員丹野だ。僕は思はず「棒だ、棒だ」と叫んだ。丹野は手にしたステッキで曳揚に掛つたが、氷がメリ〳〵と音を立て〜破れた。ぱつと飛下つた丹野のステッキの先を兵隊さんがつちり掴んだ。周君も幸い岸近くだつたので棒で救ひ上げることが出來た。勿論二人共ずぶ濡れだ。氣溫は割に高いと云つても風は身を切る如く冷い。二人共死んだ樣にぐつたりしてゐる。早速岸邊で火を焚き溫めてやつた。一安心して附近の民家を叩き起し、濡れた著物や、その時落込んだ五、六名の者を充分乾かして約三時間の後出發した。

斯うしてトラックの所まで來たが氷は一寸も張つてゐない。沈んでゐない車から荷物を全部卸し、氷の一番厚そうな側溝の上を試驗的に通してみたが、どつと落込み、エンジンもボディも完全に沈んで了つた。全員の足であり、時には命でさへある自動車は遂に二臺共完全に參つて了つた。「仕方がない歩くさ」と悲痛な諦めだ。何十粁の道でも歩かねばならぬ。併し困るのは軍の彈藥糧秣だ。棄てる譯には行かぬ。民家には一臺の橇しかない。重い部分品だけを橇に載せて、他は皆分け合つて擔いで行こう、と話してゐる所に、折よく黒咀子の方から通り

か〻つた奴を捉へて、橇は都合二臺となつた。日暮迄には楊木崗へ歸り度い。未だ朝は早いが道は遠い。一同急行軍とばかり勇氣を振つて歩いた。十時頃朝食、お茶は何もない。ざら〳〵と石を嚙む氣持の凍つた前晩の殘飯。それでも空腹の一同はガツ〳〵と喰つた。その頃から急に氣溫が低下、烈風を加へ、防寒外套を通して寒氣は身に沁み通る。裏裏で歩いてゐる樣な感じだ。だが兵隊も警備員も社員も一緒に聲を合して軍歌を高唱しつ〻、涯しない大草原を楊木崗へと急いだ。

風は一層吹き募り寒氣は益々酷くなつた。今は泥濘の水も凍つて、疲れた足は滑り勝ちだ。歩いても歩いても××××××は續いてゐる。夕陽を背に受けてひた歩きに歩いた。防寒具が身體に重い。晝食後二時間と經たぬにもう日は暮れか〻つてゐる。思はず、捨鉢な建設音頭が口を突いた。「馬は倒れる、トラックは沈む、家は未だかよ日が暮れる」牛も人も幾度か氷に轉げた。直ぐ眼の前にある楊木崗の山は仲々近寄らない。月が東の山の端から寒々と上つて來た。もう大自然の聲もなく語る人もなく、歩調は亂れた。

斯くして××に辿り著いたのが六時半、小山から七里程の道を十五時間半か〻つたのだ。其處には意外にも「參謀長」が燒餅を橇に積んで迎へに來てゐた。我々の歸りを案じて、この日暮「危いぞ」との忠告を振り切つて單身來て呉れたのだ。放浪兒としての前身を持つ愛すべき同僚、綽名は「參謀長」だ。七時半、楊木崗著。翌日は同地で休養をとり橇十臺を狩集めた。翌十九日、吹雪を衝いてに急行、四日振りに密山の土を踏むことが出來たのである。

それから長い吹雪が續いた後、第四回の踏査隊が組織され、前回同様の苦闘を經て、十一月二十四日穆稜河に達した。この時には氷層〇寸位で一應楊木崗迄引返し、二十八日再度穆稜河に赴き、遂に强行渡河を決行した。氷層約〇寸、車は全速力だ、メリ〳〵と氷は大きく裂けたが、無事對岸に到著した。片唾を飲んだ我々は、思はず萬歳を叫んだ。

幾度か飜弄された魔の穆稜河だ。眼頭が熱くなつた。穆稜河を乘切り得た後の踏査隊の行動は目覺しく活潑となつた。道はもうカンカンに凍つて面白い位にトラックはふつ飛んで行く。二十九日の午前十時過ぎ、××を越えると、遙か露領の連山が蒼く霞んで見える。

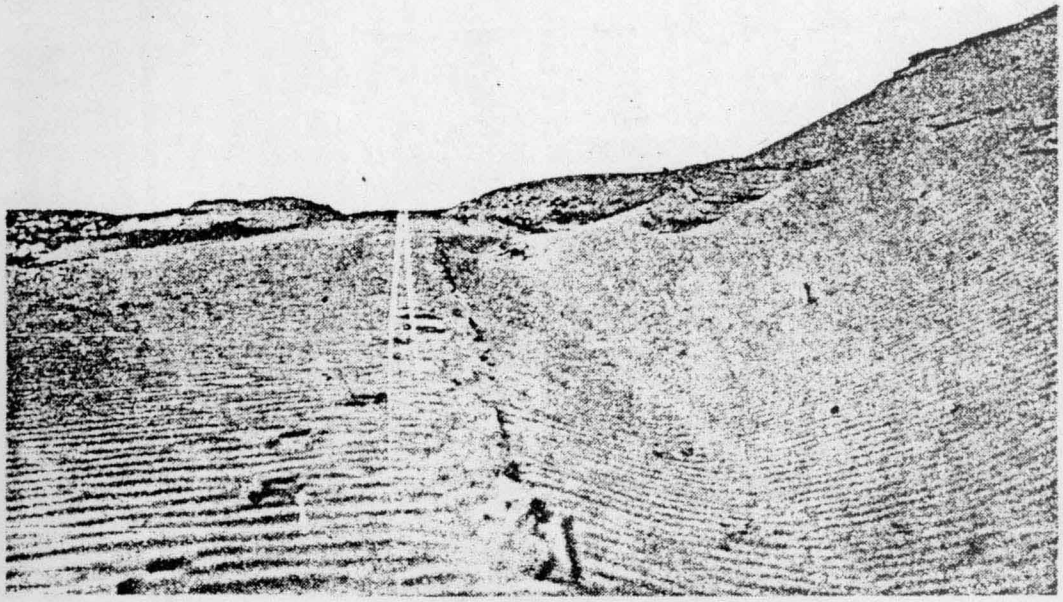
國境の街、虎林に入つたのはそれから間もなくであつた。

砂漠上の鐵道建設

加藤末吉

時に玄海灘を越へて日本内地にまで胡砂の雨を降らせる蒙古風の根源は、滿洲の西部か内蒙古の砂漠地帶である。櫻花爛漫、春を滿喫する内地に較べて、此の地方の其頃は哀れにも凄壯な砂塵の明け暮れである。而かも砂塵は天空高く三千米に達し、天日ために昏く、萬物すべてを埋めつくし、此世は忽ち滅乏するかと思はしめること屢々で、全く雄大なる感興とか詩的情緒を唆るなどと、呑ん氣なことは言つて居れないのだ。自動車が砂塵のため行路の判定に迷ひ、まご〳〵してゐる内に埋沒されたといふ例はいくらもある。

錦承線の支線葉峰線中、汐子附近から赤峰までの間は大部分との砂漠地帶で、本線の建設のため拂つた從事員の努力と苦心は誠に涙ぐましいものがある。例へば路線の選定に當つては、中心班の打つた杭が風に吹き飛ばされ或は砂に埋沒され、次の班はその所在發見に惱まされる。やつと測量を終り土工に著手しようとしても、何里先でなければ土がないといふ有樣、已むを得ず比較的眞土らしい所を選んで盛土をやる。ところが翌日はこの盛土が消へてしまふ。再び盛る、又消へる、何のことはない賽の河原の石積である。業を煮やしたあげく、盛土の



砂漠の鐵道建設　——葉峰線——

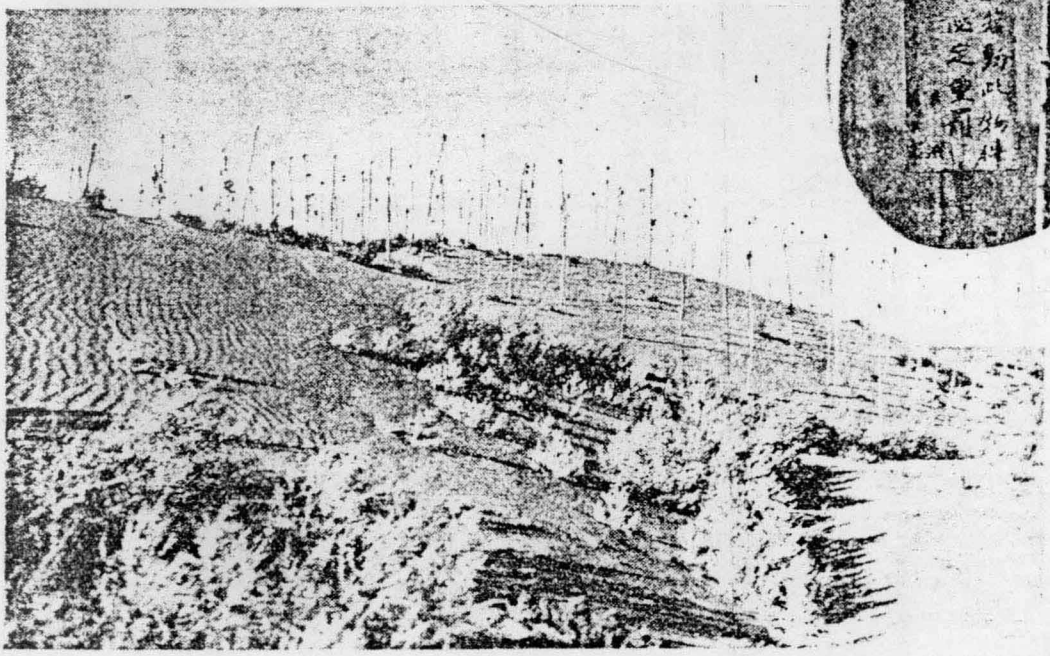
肩、法面等を麻袋を並べて防ぎ、辛うじて吹消されるの喰止めた。米國では極粗惡な油を撒き被覆して、これを防止する所もあるさうだが、一番困るのは切取箇所の埋まるのと砂丘の襲來である。

嘗つてアフリカ砂漠地方視察から歸つた先輩から、切取は絶對に避けるように注意されたが、その後約二十年、いよ〳〵難工事の實際にぶつかつたわけだ。かなり引締つた堅い地盤と信じたのに、風が吹く度に法面が削られ、施工基面まで消へて行く。かと思ふと一方では飛んで來る砂のため切取が充滿して、どうにもならない。更に平地に砂丘が出來、その次には次第に大きくなつて線路の上に被つてくる。こうなると一寸した防砂柵は役に立たぬ。内地東北の日本海岸や北海道の飛砂は之に比べると物の數でなはい。參つたのは暗渠だ。

一般常識に從つて小川の様なところに暗渠を作つたが、風が吹くと砂が溜る、掃除すると又溜る、油斷してゐると夕立が來て砂諸共雨水が押寄せる、暗渠が砂で塞がれてゐるので水のはけ口がなく、遂に線路を押流してしまつた。こういふ地方では暗渠は禁物、少し支間を大きくして砂を流す様な開桁を造らねばならぬ。

この様に苦心慘憺して建設した砂漠地帶の鐵道を砂塵から守る對策は、愼重に考究し、萬全を期すべきだが、結局防砂林を作ることが緊要である、幸ひこの地方は大てい地表から一米以内に水分がある。白楊の類徑三糎乃至五糎位のものを長さ二米から三米位に切り、冬凍結する地盤即ち地表から一米二、三十糎以上の深さに根が入る様に雨期を前にするか若くは秋の末、木の葉が

防砂林 ——線峰築——



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

落ちてから間隔を三米から五米位の碁盤目に幅四、五十米位の帶狀に挿木をする、かうすると翌年芽が出てくる。四、五年經過すれば立派な防砂林となるであらう。更に又、規模と計畫とを大にして廣範圍に亘つて挿木造林を實施すれば、蒙古地帶の大砂漠も遂には立派に綠化することが出來、胡砂の雨も遠き世の昔物語りとなるであらう。

船を支へて遂に殉職

正木吉太郎

わが建設班は昭和八年三月、今の錦承線金嶺寺站の彼岸の廢驛となつた口北營子站に到著した。當時此處が建設線の起點で、〇〇〇の陸の港であつた。未だ春遠く大凌河は堅氷に鎖され、廣い砂原はウロコ樣の波紋を描いて太陽の直射に輝いてゐた。私共は大凌河左岸の山裾や山腹を縫つて測量を開始した。

口北營子站に集荷された〇〇品は大凌河の水上や河原を傳つて、朝陽まで敷設された輕便線のトロリーで絶へず運搬されて行く。その延長四十粁、これに要した車輛〇〇臺苦力一千人、一日の運搬量〇〇〇瓲で、更に朝陽から凌源までは馬車で輸送してゐた。馬車の縱列は最長五粁にも及んだこともあつた。これらに要した輸送費概算瓲當りは金壹圓となつてゐた。

解氷期の四月も、黃砂渦卷く五月もこの調子で輸送は續けられたが、此地方の五月の午後、渦卷く黃砂の光景は物凄い。凍傷と疫痢との差はあるが、まるで猛吹雪に見舞れた樣で壞絶そのものだ。早朝は晴朗で薄氷さへ張るが、日中の水銀は卅度を突破する。十一時頃から風もないのに大凌河の砂漠地帶では龍卷の柱が目立つてく

る。だんだんその數が增へて高さが伸びる。何處ともなく風が起る。丘や山がこれに應じ地殼が鳴動する。路も河も視界から消へ、暗黑が深刻となり、締切つた家の中にさへ黃砂が侵入するのであつた。

この樣な困難と戰ひながら國道建設局は凌源、平泉、承德に事務所を設置して道路の改修を急いだ。熱河の六月は日中は暑いが、雨もなく、私共鐵道建設班の測量も工事もぐん〳〵伸びる好季節だ。何よりも道路の良くなつたのが目立つ。七月からはさしもの長い長い馬車の縱列は姿を消して自動車隊が之に代つた。自動車隊は一隊五十輛、〇〇箇〇〇と稱された。區間は朝陽、承德間三〇〇粁、輸送量一日〇〇瓲、輸送費概算瓲當り馬車輸送と同樣金壹圓である。精密な計算は遲けねばならぬが、昭和八年十箇月分の馬車や自動車による輸送費だけで二千萬圓以上に達したであらう。しかしその一日の輸送量は一箇列車のそれにも及ばないのである。しかも輸送費を鐵道による輸送と比較すると實に八倍の巨額となるのだ。

斯樣に見來れば、我々の生命とする鐵道建設が如何に有事の際に有利に展開されるか、之は單なる經費や時の損失のみの問題ではない。行動の自由性、運動性、彈力に影響するのだ。任務の重且つ大なるを今更ながら痛感する。

私共はこうした雰圍氣の裡にあつて、或は馬車縱列を橫切り、自動車隊の側面を併行し、又は追ひ縫ひして叱咤されながら、よく困苦を耐へ忍び、國策遂行の喜びに浸つて邁進した。

昭和九年二月には下板城までの測量を終り、土工々事に著手する運びとなつた。だが難關は最後の下板城・承

德間にあつたのだ。此區間は八年十月中旬、空陸のあらゆる角度から當時の線路長青木金作參事と共に現地を調査した結果、三線のうち現在の南線が選定されたのである。

灤河は削つた樣な岩壁の間を蛇行してゐる。道は河畔を傳ひ峰を越え山腹を攀る小徑で、野猿のような土民でなければ通行出來ぬ。八年十月承德行の際、承德稅關で談偶々これに觸れ、稅關でもこれに惱まされたといふことから、プロペラ船の話が出た。それが動機となつて手段に窮してゐた建設班では大連造船所に百馬力のプロペラ船三艘を註文した。大連での試運轉は海上で行はれ速力十五浬といふ理想的な成績を得た。私共は未だ見ぬ輕快なプロペラ船で灤河を馳走する樣を想像し、晝の勞苦を慰め合つた。

九年五月、氷も解け民船も遡航を開始し、待望のプロペラ船も到著した。早速下板城で現地の試運轉を試みたが、結果は期待を裏切つた。灤河の流速は普通三米、稀には七、八米の瀨もあるが、十五浬の速力が出れば別に支障を來さない。たゞ問題は第一に水深である。舟の吃水は卅糎位だが、舵の操作その他の關係上最少六十糎の水深が必要である。灤河には卅糎位の淺瀨が隨所に橫はつてゐて、しかも濁流のため其の個所が不明だ。僅かに流れや波の觀測によつて判斷する外なく之とて萬全は期せられず、航路標識を樹てて見たが失敗に歸した。河床が常に流動砂で變更しつゝあるからである。第二は汽罐の冷却水だ。泥が五%も含まれてゐる灤河の濁水では泥の停溜で汽罐に支障を來すのだ。苦心慘澹の末、下板城に一艘を殘して二艘を双頭營子に辛くも回航した。そして執拗にも何とか實用に供したいと色々試みたが結果はたゞ勞するのみ、空氣式冷却法に改良せねば使用に

漢河の早瀬

堪へない。遂に斷念して民船を傭ひ、遡行するときは陸から曳舟し、測量班は河原を傳ひ山を越へるのむ止なきに至つた。

思へば我々にとつて不運なプロペラ船ではあつた。七月の洪水で下板城の一艘が流出し、飛行機で之を發見したが、八月の洪水には双頭營子の一艘も流失せんとしたので、警備員の菩提寺君が勇敢にも身を以て支へ、懸命にこらへたが力及ばず、遂に濁流に呑まれ永へに恨みを抱いて漢河の鬼と化した。全員暗憺たる思ひであつた。

かくて幾多の哀話、悲話を殘して問題の船は齊齊哈爾建設事務所保管に決つた。

熱河線は八年三月工を起し、十一年六月開業式を擧行した。全線五百粁。二本のレールは何事もなかつたかの樣に文化の惠みを誇示してゐる。

死の踏査行

鈴木長明
菅壽太郎

舊い地圖での苦心

滿洲には今でこそ詳細正確な地圖があるけれど、在來の地圖では實際其場に當り測量器械を用ゐ、スケールを使用する場合に多くの誤差のあることに直面するのである。鐵道建設のみならず、凡ての調査旅行者達はこの點でどれだけ惱まされたか分らない。

正確な地圖のない當時では在來の地圖に據る外に途がなかつた。それで鐵道建設の起點と終點とが確定すると、先づこの地圖に據つて線路の概略の見當を附け、次ぎに飛行機で地圖上の計畫線を鳥瞰し、大睨みの見當を附けるのである。但し飛行機上の觀測では山岳の高低の差が餘程の熟練と經驗とを積まねば十分に分らぬ。

機上の觀測者は地圖に記入されない山や川、その他の地形の變形を記入し、次に計畫線を中心に寫眞を撮影す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com